

2022年度 東洋大学 IR ニュースレター Vol. 4 (通算第9号)

学生の生活・授業外活動と授業経験 — 2022年度在学生アンケートの結果分析 —



東洋大学
学長・IR室長 矢口悦子

今年度の在学生アンケートの概要についてご報告致します。2022年4月より授業は対面を軸に実施してきましたが、授業以外の学生たちの生活においても、2020年度とはかなり生活時間が異なっており、多様な活動が学生たちの生活に彩りを与えていることが見て取れます。また、学生たちの不安も前年度より軽減しています。今後の活動への期待も、海外留学・研修や資格・免許の取得、ボランティア活動など経験したいことははっきりと見えてきました。コロナ禍での経験を踏まえて、非対面授業を活用することについても、一定の期待が寄せられています。一方で、部活・サークル活動については、断念したという認識はあるものの、これから体験したいという思いはそれほど強くないという気になる結果が出ました。すでに、3年もの間閉ざされていたことで、そうした活動を継承できなくなっているのかもしれない。学生生活の文化的な豊かさや多様な交流の場が広がるように、多面的に応援してまいります。

調査の概要

実施期間: 2022年11月25日(金) ~ 12月26日(月)

回答状況: 在学生(全学部1~4年生) 28,991名中6,750名(回答率23.3%)

学年の分布: 1年生 35.2%、2年生 25.5%、3年生 20.5%、4年生 18.8%

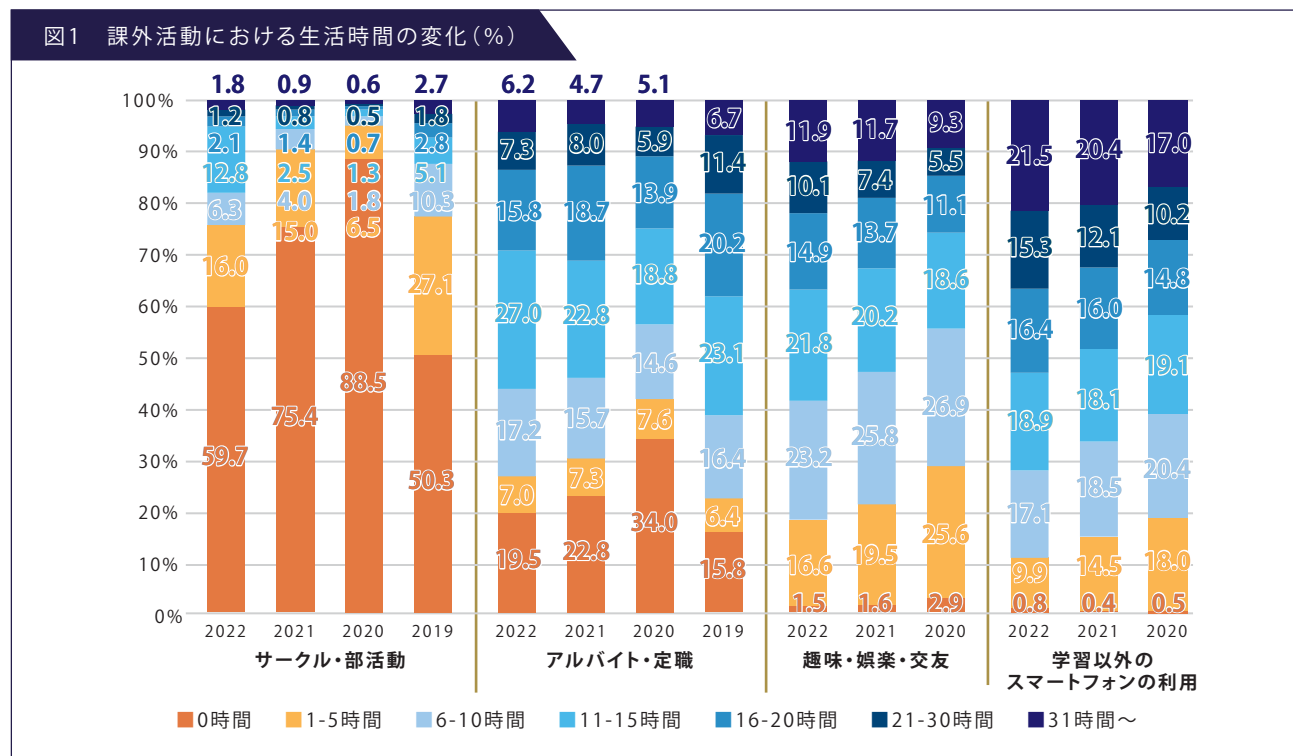
実施方法: Webアンケート(Googleフォーム)

分析担当: IR室 教授 劉文君

分析の目的: 対面授業の再開に伴い、学生の生活、学修、課外活動の状況がどのように変化したか、また、どのような不安を抱えているのかを明らかにする。さらに、経験した授業形態について、過年度と比較しつつ、その実態を明らかにし、今後の学生生活や学修のサポートをより効果的なものとするためのエビデンスを探る。

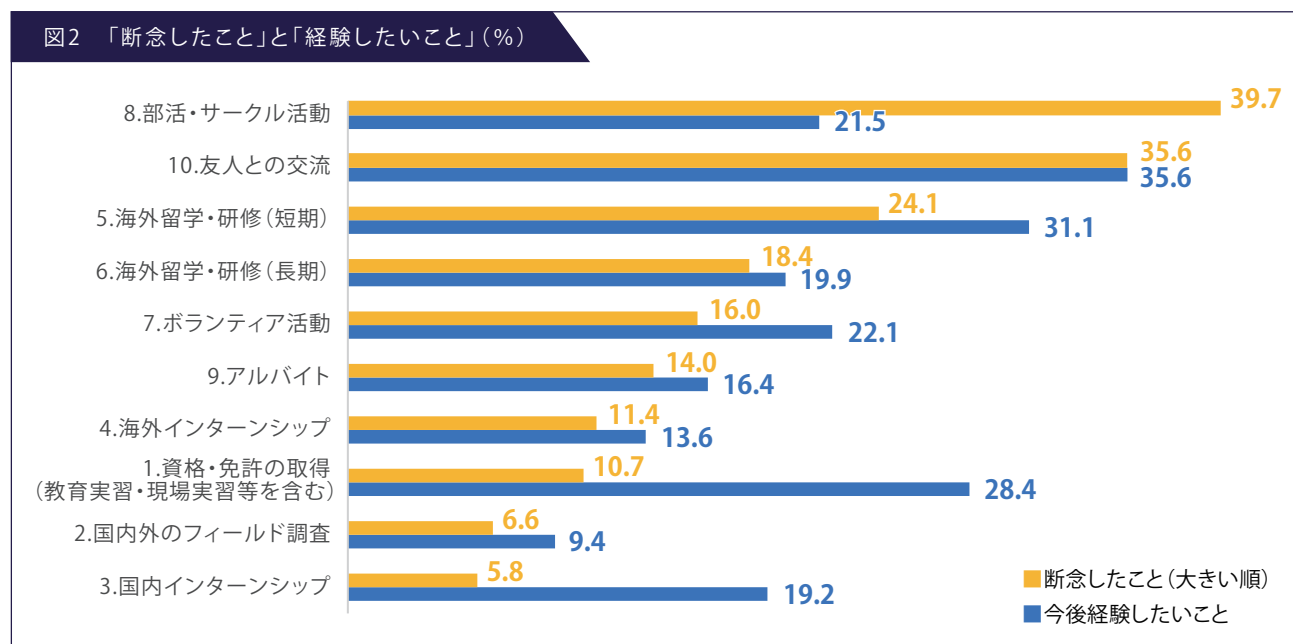
1. 課外活動における活動時間の变化

図1は、設問「春学期の平均的な1週間（7日間）の生活時間について、当てはまる時間数を選択してください。」における各活動への回答を示している。「サークル・部活動」「アルバイト・定職の時間」では、<0時間><1-5時間>と回答した割合が、コロナ前の2019年度の水準までは戻っていないものの、2020年度の高い割合から2022年度に向けて顕著に通減している。また、「趣味/娯楽/交友」「学習以外のスマートフォンの利用」についても、<1-5時間><6-10時間>と回答する割合が減少している（2019年度は未調査）。全体として、課外活動における様々な活動時間に増加傾向が見られる。



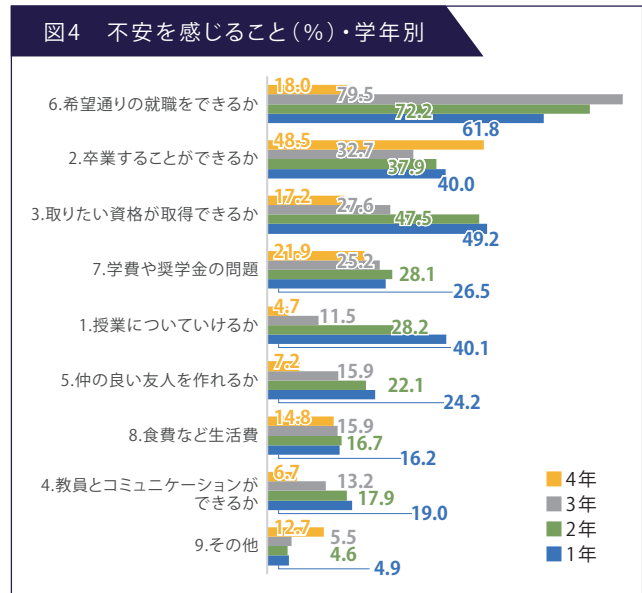
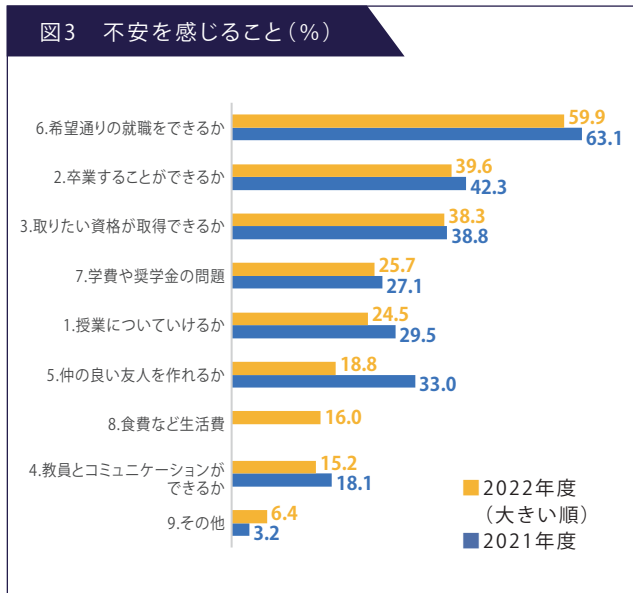
2. 課外活動の経験

設問「大学に入ってから、新型コロナウイルスの影響で断念したことはありますか。(複数選択)」と「今後、新型コロナウイルスの事態が収束した後、経験したいことはありますか。(複数選択)」の回答を比較(図2)すると、「部活・サークル活動」は<断念した>学生が多いが、<今後経験したい>は半数程度にとどまる。「資格免許」「国内インターンシップ」「海外留学・研修(短期)」「ボランティア」で<今後経験したい>とする学生が多い。



3. 不安を感じること

図3は設問「現在、不安を感じていることを教えてください。(複数選択)」に対する回答の2022年度と2021年度の比較である。就職関係の不安が最大となっている。前年と比べ、すべての項目(「その他」を除く)で不安を感じる割合が減少し、特に「仲の良い友人を作れるか」で大幅な減少が見られた。また、2022年度の回答を学年別に比較(図4)すると、ほとんどの項目で低学年ほど不安が大きく、3年生では就職、4年生では卒業に対する不安が高くなっている。



4. 経験した授業形態

図5は設問「これまで受けた授業で、次のようなことがどれくらいありましたか?」に対して、各項目に<よくあった>と<ある程度あった>と回答した割合の合計である。「期末試験のほかに小テストやレポートなどの課題が出される」「出席が重視される」は減少傾向にある一方で、他の項目は増加傾向にあり「理解がしやすいように教え方が工夫されている」「授業内容に興味をわくように工夫されている」は8割を超える学生が経験している。「グループワークなど、学生が参加する機会がある」「授業中に自分の意見や考え方を述べる」など学生の授業参加をうながす双方向型の形態も増加傾向にあるが6割程度にとどまり、今後の伸びる余地を残す。前号で特集した『全国学生調査』において、全国と比べ本学が高い割合を示した「主に英語で行われる授業」、低い結果となった「TAなどによる補助的な指導がある」は双方とも2021年度より増えてはいるが、5割に達していない(全国学生調査の結果は前号のニュースレターを参照)。

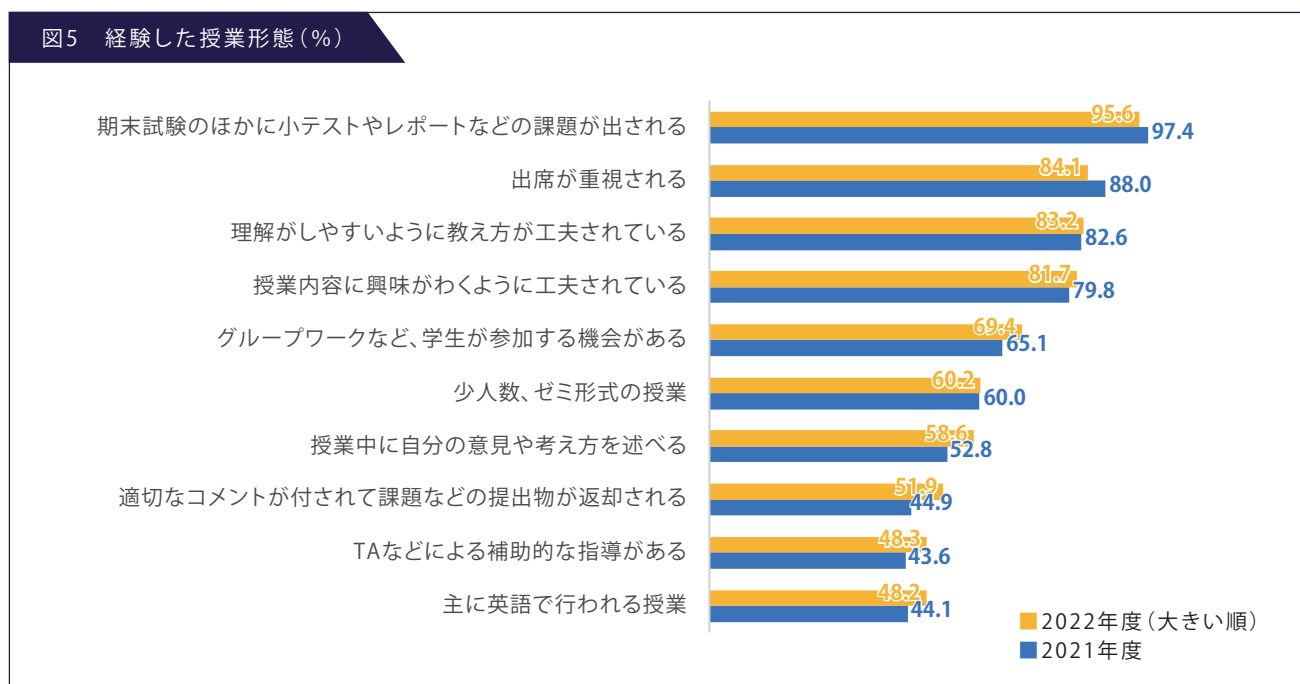
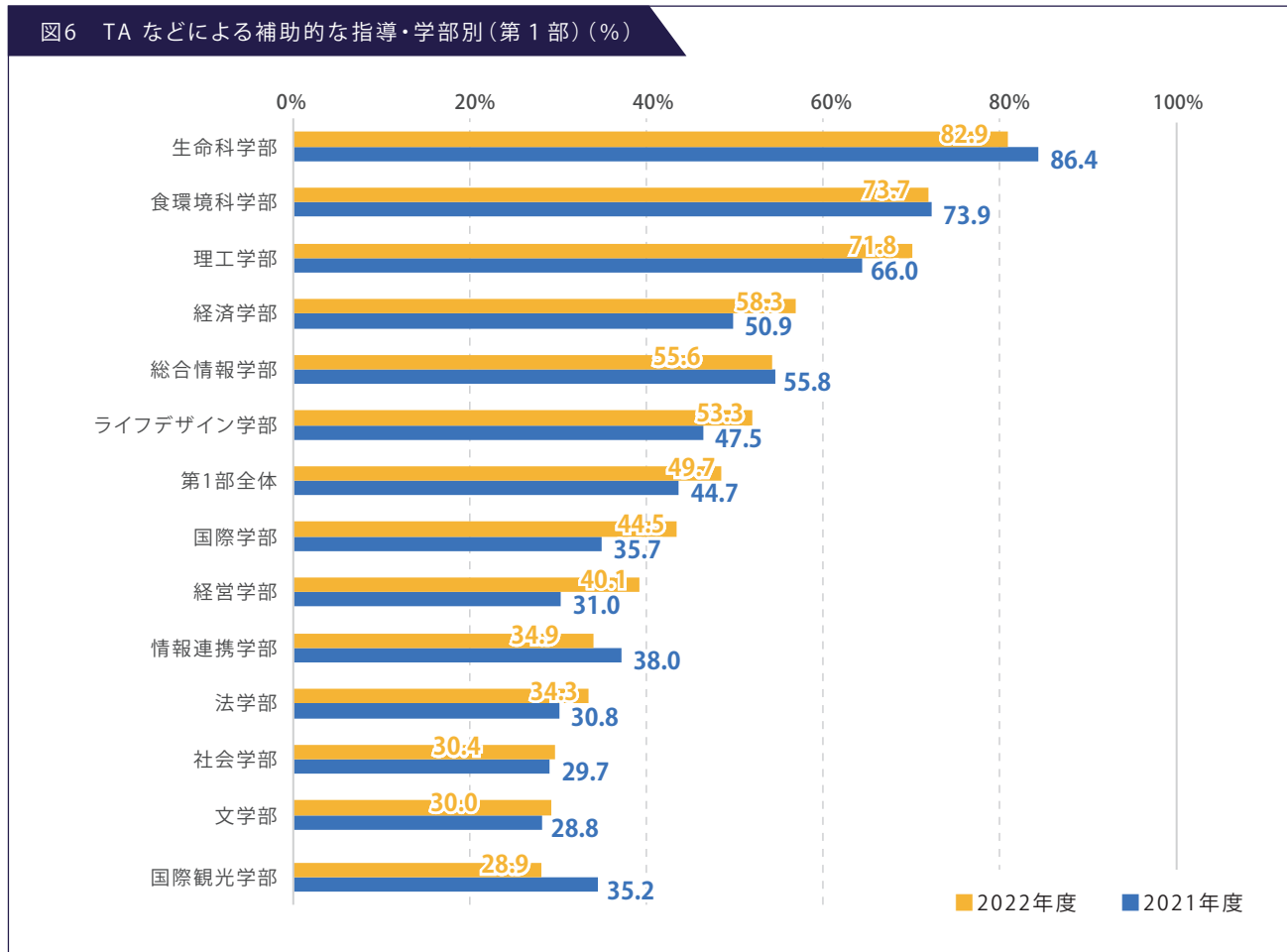


図6は項目「TAなどによる補助的な指導がある」の回答について、学部（第1部）別の結果を示している。学部により大きな差があり、理系学部の割合が高く、文系学部の割合は低い傾向となっている。



まとめ

対面授業の再開・拡大につれて、「サークル・部活動」「アルバイト・定職」などの時間が増え、学生生活はコロナ前に戻りつつある。ただし、「部活・サークル活動」については＜今後経験したい＞割合が、＜断念した＞割合を大きく下回る。「不安」も減少の傾向にあり、特に「仲の良い友人を作れるか」の不安が大幅に減少した。また、学生の受けた授業は、学生の理解・興味をもたらす工夫のある授業が微増し、学生の参加をうながす双方向型の授業の割合も増えている。全国調査と比べると、東洋大学では「主に英語で行われる授業」が多い。一方で「TAなどによる補助的な指導がある」の割合が低く、分野別に見ると理系学部の割合が高く、文系学部が低い傾向にある。

TAについては、欧米の大学の学士課程で多用されており、授業準備、授業運営、課題添削・テスト採点、オフィスアワー、スタディグループの実施などの幅広い活動を行う。TAは一般的に大学院の修士課程や博士課程に所属する学生が担い、学期が始まる前にTAとしてのルールや教え方についての研修を実施する。TAを担当する大学院生にとって、経済的報酬（学費免除、給与）、指導経験を得られる（就活に有利）、授業の理解が深まる（現場の視点をもって学べる）などのメリットがある。また、学士課程の学生にとっても、TAとなら学修や生活などの悩み相談のハードルが低いという利点がある。